



くすの木

春日部市立医療センターだより

発行
春日部市立医療センター
有馬 健
発行日
令和8年7月1日
編集
広報委員会
特別号

2026年7月1日春日部市立医療センターは 開院10周年を迎えました



ホームページも
リニューアルしました

春日部市長
岩谷 一弘



春日部市立医療センターが、開院10周年という大きな節目を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。

この10年間、医療センターは地域の中核病院として、市民の皆さまの命と健康を支える重要な役割を担ってまいりました。

救急医療をはじめ、各種専門医療の提供に努めるとともに、地域周産期母子医療センターとして、埼玉県東部地域の周産期医療体制の一翼を担い、産後ケア事業など本市の子育て支援施策にもご協力いただいております、子どもを安心して産み育てる地域づくりにも大きく貢献いただいております。

また、新型コロナウイルス感染症への対応など、さまざまな場面において地域医療を支え続けてこられたのは、職員の皆さまの献身的な努力の賜物であり、深く敬意と感謝を申し上げます。

医療を取り巻く環境は大きく変化し、地域医療の確保には多くの課題があります。そのような中においても、公立病院には、市民の皆さまが安心して暮らせる地域づくりを支える重要な役割が求められています。

医療センターには、これからも地域にとって欠かすことのできない病院として、市民の皆さまに寄り添い、安心と信頼の医療を提供し続けていただくことを願っております。

市といたしましても、将来にわたり地域医療を守り、市民の皆さまが安心して暮らし続けることができる地域づくりに努めてまいります。

結びに、春日部市立医療センターのさらなる発展と、病院に関わるすべての皆さまのご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。



地域周産期母子医療センターの様子

春日部市病院事業管理者
三宅 洋



春日部市立医療センターが開院10周年という大きな節目を迎えられましたことを、大変感慨深く感じております。

この節目を迎えることができたのは、地域の皆さまをはじめ、市の医師会、歯科医師会、薬剤師会の皆さま、地域の医療機関や介護福祉関係機関の皆さま、行政機関の皆さま、そして開院以来、医師派遣や人材育成などを通じて当センターを支えていただいている日本大学をはじめとする関係機関の皆さまのご支援とご協力の賜物であり、心より感謝申し上げます。

開院前、病院の設計や整備に関する議論を重ねていた頃、「地域の皆さまにとってどのような病院が必要とされるのか」「どのような医療を提供していくべきか」について、多くの関係者とともに検討を重ねてまいりました。

当時は、図面の中に描かれていた病院が、地域医療を支える拠点として形となり、多くの患者さまやご家族の皆さまに利用されている姿を思い描きながら、大きな期待を抱いていたことを今でもよく覚えています。

その後、開院から10年が経過した現在、当センターは地域の中核病院として、救急医療をはじめ、各種専門医療や新型コロナウイルス感染症への対応など、地域に必要な医療の提供に努めてまいりました。

また、地域周産期母子医療センターとして周産期医療体制の一翼を担うとともに、地域

がん診療連携拠点病院として、がんゲノム医療や緩和ケアの推進など専門性の高い医療の充実に取り組んでまいりました。

こうした歩みは、地域の皆さまのご理解とご支援、そして日々医療現場を支える職員一人ひとりの努力によって築かれてきたものであり、改めて深く感謝申し上げます。

一方で、人口構造の変化や医療需要の変化、人件費や物価の高騰などにより、病院経営を取り巻く環境は厳しさを増しています。

そのような中においても、公立病院には、地域に必要な医療を将来にわたり安定的に提供していく使命があります。

当センターでは今後、がん医療のさらなる充実を図るとともに、病院中心ではなく、市民の皆さまや患者さまを中心とした医療の推進に努めてまいります。

また、地域医療を支える人材の育成に向け、充実した研修プログラムの整備や働きやすい職場環境づくりを進め、職員がやりがいと誇りを持って働くことのできる病院を目指してまいります。

開院当時に描いた「地域に必要とされる病院」を、これからも将来にわたり持続していくことが私たちの責務です。

今後も地域の皆さまに信頼され、安心して利用していただける病院を目指し、職員一丸となって取り組んでまいります。

結びに、春日部市立医療センターのさらなる発展と、地域の皆さまのご健勝を心より祈念申し上げ、10周年の結びの言葉といたします。



春日部市立病院から春日部市立医療センターへ

病院長
有馬 健



春日部市立医療センターは、2026年7月をもって新築移転から10周年を迎えます。この節目を迎えるにあたり、これまで病院を支えてくださった地域の皆さま、関係機関の皆さま、そして日々医療の最前線で尽力されている職員の皆さまに、心より感謝申し上げます。

私は2000年4月、当時の春日部市立病院に赴任いたしました。当時の病院は老朽化が進み、狭隘な施設環境の中で診療を行っていました。新築移転への期待は高まっていたものの、計画はなかなか前に進まず、一時は病院廃止まで議論されるなど、病院全体に重苦しい空気が漂っていたことを今でも鮮明に覚えています。

そのような中、多くの市民の皆さまの支えにより、市立病院の存続が決定し、2010年に新病院への建て替え移転が正式に決まりました。新病院の設計に際しては数多くの議論が行われましたが、途中で「多目的ホール」をなくす案が出た際、私自身が強く反対したことも懐かしい思い出です。結果として現在、多目的ホールは講演会や研修、災害時対応など様々な場面で活用されており、必要不



心肺蘇生法実習の様子



国民保護訓練の様子

可欠な設備となっています。

移転の約1年前からは、本格的な引っ越し準備が始まりました。全部署との綿密な打ち合わせを繰り返し、患者搬送計画や医療機器配置、診療動線などを細かく検討しました。また、移転を機に電子カルテ化を進めることとなり、2016年1月から外来カルテの電子化を開始し、新病院では入院部門も含め全面電子カルテ運用へ移行しました。移転直前には新病院で電子カルテの運用リハーサルや患者搬送訓練を繰り返し実施し、2016年6月30日に患者移送を行いました。患者数調整も含め周到に準備した結果、大きな混乱なく無事移転を完了できたことは、病院職員全体の努力の賜物であったと思っています。

新病院は、明るく広い空間となり、患者さまにも職員にも非常に良い環境となりました。当初はICU・CCUや手術室7番など未稼働部分もありましたが、徐々に患者数も増加し、高い病床利用率を維持するようになりました。

しかし、2020年、新型コロナウイルス感染症の流行により病院の状況は一変しました。当初は陰圧室2床で対応を開始しましたが、感染拡大に伴い、2020年3月からは全室個室である5E病棟をコロナ病棟として運用し、さらに発熱外来も開設しました。当初は外部委託で行っていたCOVID-19の検査も、

同年5月からは院内でLAMP法検査が可能となりました。

さらに2020年末、第3波の到来時には、県からの要請により6N病棟全体を改装し、22床のコロナ専用病棟として運用を開始しました。当時は高齢者の重症例が相次ぎ、治療に難渋する日々が続きました。2021年のデルタ株流行時には、ワクチン未接種の40～60歳代に重症肺炎が多発し、救命できなかった症例も少なくありませんでした。医療従事者にとっても極めて厳しい時期でしたが、全職員が一丸となり懸命に対応を続けました。

特に、山岡先生を中心とした感染対策委員会の尽力により、当センターでは大規模クラスターを発生させることなく乗り切ることができました。これは当センターが誇るべき成果であり、職員一人ひとりの高い使命感と責任感の表れであったと感じています。



新型コロナウイルス感染症対応の様子

コロナ対応の最中でも、病院機能の充実は着実に進められました。移転当初に開設できなかったICU・CCUは、2022年4月にHCユニットとして運用を開始しました。また、2024年には病院機能評価を受審し、多くの課題に向き合いながらも無事認定を受けることができました。さらに2025年には、加藤先生をはじめ関係スタッフの努力により、緩和ケア病棟が正式に稼働し、加算取得を伴う形で運営を開始することができました。

私は2024年4月より病院長を務めておりま

すが、現在、公立病院を取り巻く経営環境は大変厳しい状況にあります。コロナ関連補助金の縮小、診療報酬改定、人件費上昇などにより、多くの公立病院が赤字経営となっており、当センターも例外ではありません。しかし、職員の皆さまが入院患者数、外来患者数、救急搬送受入件数、手術件数の増加に真摯に取り組んでくださった結果、経営状況は着実に改善傾向を示しています。今後の診療報酬改定によるさらなる改善にも期待したいところです。

振り返れば、この10年は決して平坦な道のりではありませんでした。しかし、そのたびに病院全体が一致団結し、困難を乗り越えてきました。私は、この病院で働く職員を誇りに思っています。そして、春日部市立医療センターは、地域医療を支える中核病院として、今後もさらに成長していけると確信しております。

これからも「地域に信頼される病院」であり続けるため、職員一同力を合わせ、より良い医療の提供に努めてまいります。今後とも春日部市立医療センターへのご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



春日部大風マラソンでの救護の様子

看護部長
笠原 洋子



当センターはこのたび、新築移転から10周年という節目を迎えることができました。この10年の歩みは、市民の皆さまをはじめ、地域の医療・福祉関係者の皆さまからの温かなご支援、そして、職員一人ひとりの努力と協働の積み重ねによって築かれてきたものです。これまで、当センターを支えてくださったすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。

10年前の移転当日は、患者さまの安全と安心を最優先に、全職員が一丸となって移送にあたりました。特に医療依存度の高い患者さまにはモニタリング体制を強化し、移送中も継続的に状態観察を行うなど、万全の体制で臨みました。環境の変化に不安を抱かれる方も多い中、丁寧な声かけや説明を心がけ、患者さまが安心して新しい病棟での療養を開始できるよう細心の注意を払いました。

また、新築移転に際しては、看護師をはじめとする医療スタッフが、より効率的に安全に業務を行えるよう、病棟内の動線改善にも取り組みました。物品管理スペースの集約と統一や、スタッフステーションの壁を取り除くことで病室への移動距離を短縮するなど、日々の業務負担を軽減し、患者さまのもとへ向かう時間を確保する工夫を随所に取り入れました。これらの取り組みは、スタッフの働きやすい環境づくりだけでなく、迅速で質の高い看護ケアの提供にもつながっています。

この10年を振り返るうえで、新型コロナウイルス

への対応は決して忘れることのできない出来事です。先の見えない状況の中でも、医師、看護師、医療技術職、事務職員など、多くの職員が「地域医療を守る」という強い使命感を胸に、職種の垣根を越えて支え合いながら医療を継続しました。面会制限により、患者さまやご家族の皆さまが、当たり前で共有できていた時間が失われる中で、私たちは「人に寄り添う看護とは何か」を問い続けました。直接触れ合う時間が限られていても、不安や孤独に寄り添い、その人らしさと尊厳を支える姿勢は変わることはありませんでした。

困難な時期を乗り越えることができた背景には、市民の皆さまから寄せられた温かなご理解と励ましの声がありました。応援の言葉やお心遣いは、現場で働く職員にとって大きな支えとなり、「地域に支えられている病院」であることを改めて実感いたしました。この場をお借りして、深く御礼申し上げます。

看護部では、「ハートフルケア-心のこもったやさしいケア-」を大切にしています。やさしさとは、相手の思いに耳を傾け、その人の立場に立って考え、専門職として確かな知識と技術で支えることだと考えています。患者さまの尊厳を守り、自立を支援し、チーム医療の一員として最善の看護を追求すること。それが私たちの変わらぬ使命です。

これまで築いてきた信頼と経験を礎に、次の10年に向けて、より質の高い看護と安心できる医療の提供を目指してまいります。市民の皆さまに「この病院があってよかった」と感じていただける存在であり続けられるよう、そして、職員が誇りをもって働ける職場であり続けられるよう、職員一同、力を合わせ歩み続けてまいります。

事務部長
神谷 司



開院10周年を迎えるにあたり、これまで当センターを支えてくださった患者さまやご家族の皆さま、地域の皆さまに心より感謝申し上げます。

また、日々それぞれの立場で医療を支え続けてきた職員一人ひとりの尽力に、深く敬意を表します。

この10年を振り返ると、病院機能評価の認定取得に向けた取組が強く印象に残っています。認定という一つの目標に向かい、医師、看護師、医療技術職、事務職をはじめとする全ての職員が職種や部署の垣根を越えて協力し、それぞれの立場から課題の改善や病院機能の向上に取り組みました。

この経験を通じて培われた組織としての一体感や改善を積み重ねる姿勢は、現在の当センターを支える大きな力となっています。

また、この10年間には、新型コロナウイルス感染症への対応をはじめ、これまで経験したことのない大きな課題にも直面しましたが、そのような状況の中でも、多くの職員が部門を越えて連携し、それぞれの役割を果たしながら地域医療を守るために力を尽くしてきました。

患者さまやご家族の皆さまにも、多くのご理解とご協力をいただき、必要な医療の提供

ができたことに、改めて感謝申し上げます。

現在、医療機関を取り巻く環境は、人件費や物価の高騰、医療需要の変化などにより全国的に厳しさを増しています。

公立病院には、採算に関わらず必要な医療を絶やさない役割が求められており、将来にわたり地域医療を守っていくためには、安定した経営基盤の確保が重要となっています。

当センターにおいても、限られた医療資源を有効に活用しながら、業務改善や効率化、施設・設備の適切な維持管理などに取り組み、持続可能な病院運営に努めています。

こうした取組は、将来にわたり必要な医療を安定して提供していくための大切な基盤であると考えています。

また、地域の皆さまに安心して医療を受けていただくためには、当センターだけで医療が完結するものではありません。

地域の医療機関や介護・福祉関係機関との連携を深め、それぞれの役割を生かしながら、切れ目のない医療や支援につなげていくことが重要であると考えています。

当センターが目指すのは、地域にとって必要とされ、いつまでも手をつないでいられるような、困ったときに真に頼りになる病院であり続けることです。

そのためにも、これまで築いてきた職員同士の連携の力を大切にしながら、地域の皆さまに信頼される病院を目指し、これからの10年も職員一丸となって取り組んでまいりますので、引き続き、ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

編集後記

春日部市立医療センターの開院10周年を迎え、「くすの木」特別号をお届けいたします。本誌タイトルの由来となったくすの木は、旧病院時代に大切に育てられ、新病院移転の際には病院の西側に新しく植えられました。旧病院の「くすの木」をご記憶の方も、新しい「くすの木」をぜひご覧いただき、病院と共に歩んできた歴史とこれからの姿を感じていただければ幸いです。